

市政トピックス

東日本大震災から10年 —経験と教訓を次世代へ伝える

7月10日・14日の2日間、東二番丁小学校で、市職員が小学6年生を対象に東日本大震災に関する出前授業を行いました。これは、宮城教育大学・仙台市・市教育委員会会の3者で締結した「防災教育・啓発の推進等にかかる連携及び協力に関する協定」の一環として行われたものです。東二番丁小学校では、これまでも震災遺構仙台市立荒浜小学校を訪問するなど、防災教育を進めてきました。今回は、東日本大震災当時1・2歳だった児童が震災を知り、その教訓



▲授業では、海外からの支援などについて、児童たちから質問が出ました

を学ぶことを目的として「復興まちづくり」と「震災遺構」をテーマに社会科の授業が行われました。7月10日に行われた授業では、防災環境都市・震災復興室の職員が「仙台市の復興とまちづくり」と題し、震災の被害状況や震災復興計画の策定までの過程を写真などを駆使して紹介。さらに、東部復興道路の整備を例に、専門家の意見や、地域住民の要望など、さまざまな立場の声を大切にしながら、道路のルートが決定に至った経緯を説明しました。

児童たちは、メモを取りながら、真剣なまなざしで授業に取り組んでいました。終了後、児童からは「仙台の防災の取り組みが、海外からも注目されていることを知った」「説明を聞いて、一人一人がまちづくりの主役だということに気が付いた」などの感想が寄せられました。市では、今後も小・中学生など震災を知らない世代を対象に、震災の経験と教訓を伝える取り組みを進め、未来の防災につなげていきます。

市政トピックス

市政トピックス

朴沢学園裁縫学習資料を有形文化財に指定



▲裁縫ひな形としてミニチュアサイズで作成された衣服

朴沢学園は明治12年に朴澤三代治が開学した裁縫学校を前身とし、全国に裁縫教員として活躍する卒業生を輩出してきました。同学園に明治10年代から昭和30年代に在籍した生徒が裁縫の技法を学ぶ授業等を通じて製作した資料3956点が、8月3日に有形文化財に指定されました。この資料には基礎的な縫い方を学習した資料や裁縫のひな形などが含まれます。平成23年には、朴澤三代治が自ら編さんした裁縫教育の教科書などの教育資料が有形文化財に指定されており、今回の指定と合わせて、明治から昭和にかけての裁縫技術の教育・習得過程を包括的に知ることが出来ます。近代日本の裁縫教育の実態を示す重要な歴史資料であることが評価されました。

市政トピックス

戦後75年戦災復興展を開催

戦災復興記念館で7月10日から8月31日まで「戦後75年戦災復興展」が開催されました。企画展「戦時下の東北学院」では、空襲により被災した校舎の様子や学徒動員の様子を つづつた生徒の手紙などを展示。また、特別展「がけつぶちの防空壕」では、市内に現在も残る崖面に掘られた横穴式防空壕を写真で紹介しました。会場を訪れた人は空襲のすさまじさを物語る展示の数々に見入っていました。また戦後75年の特別企画「とどけ！ほしにねがいを」として仙台市在住のシンガーソングライター・伊東洋平氏が歌う「優しさの色の歌」の動画を上映。この歌は、市内の小学生711人から寄せられた平和を願うメッセージを基に伊東氏が作詞・作曲したもので、会場ではそのメッセージの一部も展示されました。

「優しさの色の歌」は市の公式YouTubeチャンネル「せんだいTube」で配信しています。ぜひお聴きください。



▲伊東洋平氏

市政トピックス

まちめぐりを楽しみながらトリックアート体験

8月5日から18日まで、スリーエム仙台市科学館の企画展「トリックアートでまちめぐり」が開催され、勾当台公園や定禅寺通など4カ所にトリックアートが設置されました。新型コロナウイルスの感染予防のため屋外に分散させて展示し、まちを巡りながら、楽しめるよう企画されたものです。トリックアートとは、目の錯覚を利用しただまし絵のことで、戦前・戦後の七夕まつりの様子や昭和30年代の四ツ谷用水の姿などが、昔の面影とともに立体的に再現されました。定禅寺通には、青葉まつりでのすずめ踊りの様子が今にも動き出しそうに描かれ、訪れた人はその場に参加しているような感覚を味わいながら、カメラに収めるなど楽しんでいました。



▲青葉まつりのマスコットの「すずのすけ」が飛び出して見えるトリックアート

市政トピックス

仙台市が「SDGs未来都市」に選定されました

SDGs(持続可能な開発目標)とは、平成27年に国連サミットで採択された、令和12年までに達成すべき17の国際目標です。持続可能で多様性と包括性のある社会の実現のため、「貧困をなくそう」「質の高い教育をみんなに」など、幅広い分野について、取り組むべき目標が掲げられています。7月17日、仙台市は内閣府より、SDGsの優れた取り組みを行う都市「SDGs未来都市」に選定されました。この選定は、平成30年に始まり、これまで全国93都市が選ばれています。

本市は、「防災環境都市・仙台」の推進」を掲げ、提案。東日本大震災の被災経験を踏まえた地域防災リーダーの養成や温室効果ガスの削減アクションプログラム、防災を基軸とした新しい産業の創出など、防災や環境配慮の視点を織り込んだ本市ならではのまちづくりが実現性の高い提案であると評価されました。市では、今後も市民の方々と連携してSDGsを推進していくことを共通理念として、まちづくりを進めていきます。

3.11 震災文庫を 読む

東日本大震災を語り継ぐための市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から「よりのすけ」の本を「紹介します」。

「詩集 わが大地よ、ああ」



若松丈太郎 / 著 土曜美術社出版販売

若松は福島県南相馬市在住の詩人だ。東京電力福島第一原発事故への憤りを詩に編んだのが本書だ。冒頭の詩に、被災した119の地名と6つの川の名前が、2番目の詩に74の職業が列挙される。声に出して読むと、そこで暮らす人たちの姿が、生活を根こそぎ剥ぎ取られた人たちの思いが立ち上がってくる。詩は声に出して読むのが良い。黙読では、字面をスベる時があるが、音読は言葉の一粒を確実に辿る。詩人は、時空を超えて人の暮らしを慈しみ、公が強い非道徳を怒るのだ。「沈黙は恐ろしい」。後の、アーサー・ビナード、齋藤さだむとの共著「ひとのあかし」(清流出版)の原詩は本書に収録されている。

「月を流さず 和尚の語り草」



早坂文明 / 著 蕃山房 刊

早坂は宮城県山元町徳本寺の住職だ。過去帳は、天明4年(天明の飢饉)の死者が一番多く、平成23年(東日本大震災)もそれに次いで異常さを物語るという。200人を超える津波の犠牲者を弔う日々。僧の業とはいえ、「和尚様も人間ですから、きつとつても辛かっただろうな」と思いました。「やなせなさんの言葉だ。その和尚を支えた言葉が「水急不流月」。人間に本来宿っている仏性を、生活の情景として描いたという」徳本寺のテレホン法話に宿る千体仏(加賀尋画)は見えてみたい。本書は徳本寺主宰「テレホン法話ライブ」の、「法話」と「法話」との繋ぎのおしやべりに本願があるとして、活字化したものだ。

●紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・1585